

二〇一七年度 博士学位論文

近代文章表現における美辞麗句集
——表現の再構築と受容

立教大学 文学研究科 日本文学専攻 博士課程後期課程
14PG004H 湯本 優希

目次

序

第一部 明治期における美辞麗句集の全体像

第一章 明治期における美辞麗句集の実態

第二章 類語集の系譜と消長

第三章 近代大阪の出版界と美辞麗句集——心齋橋筋の書肆矢島誠進堂を中心に

第四章 学校教育における美辞麗句集——漢文教育と作文教育

第二部 美辞麗句表現と美文

第五章 大町桂月を軸とした美辞麗句共有のネットワーク——美文とはなにか

第六章 小島烏水の叙景——雑誌『文庫』の美文をめぐって

第七章 『花紅葉』の構成と受容——美文教科書としての軌範性

第三部 美辞麗句による風景描写

第八章 月ヶ瀬観梅紀行文における美辞麗句——トレース表現と美辞麗句集

第九章 杉田観梅紀行文における美辞麗句——同質化される風景

第十章 美辞麗句によって「幻出」される風景——明治三十年代の『文芸倶楽部』を
視座として

跋

美辞麗句集目録

参考文献

要約

本論文は、明治期における美辞麗句集および美辞麗句表現について、さまざまなジャンルや形態の文章に基づきその実態を検証し、美辞麗句という文章表現が、近代の文章表現史においてどのように位置づけられるか、文章表現の近代化にあたりどのような役割を担ったのかということについて考察したものである。

第一部「明治期における美辞麗句集の全体像」では、明治期における美辞麗句集の全体像を把握し、その生成や展開に関する調査を行った。

第一章「明治期における美辞麗句集の実態」では、『国立国会図書館所蔵明治期刊行図書目録』第四卷（国立国会図書館、昭和四十九年）において「作文」として括られた資料二千七百十三点のうち、「作文」千六十四点と、「女子文（女子書簡文を含む）」三百六十六点、あわせて千四百三十点について精察している。まず、これらの作文書には、主として作法書、文範書、模範文例集、類語集という四種の形態が見られた。さらに各形態の中から美辞麗句に関する欄を設けている資料を「美辞麗句集」として抽出した。「作文」の資料の中に五百八十五点の美辞麗句集があり、約三分の一以上が美辞麗句の紹介を行っている。語や例文ではなく、美辞麗句という表現形式が重要視されていたのである。ここでは五年毎の刊行数の推移や各形態の冊数について図示し、詳述している。明治期の作文という現象に際して美辞麗句表現が根底にあったことを述べた。

第二章「類語集の系譜と消長」では、美辞麗句集の形態の中でとりわけ美辞麗句のみに特化した類語集について述べた。類語集という資料は明治初期には漢文体で著わされているものがほとんどであり、漢語の学習のためのものとして編纂されていた。その後明治二十年代の空白を経て、明治三十年代の美文の流行によって再び同様の形態で美文のための資料として編まれている。その変遷を追うと漢文訓読調から口語文へとゆるやかな変化が見られるものの、採録されている美辞麗句に大きな変化はない。美文の流行という現象から類語集の形態をとりふたたび世に広がりを見せたのである。

第三章「近代大阪の出版界と美辞麗句集——心齋橋筋の書肆矢島誠進堂を中心に」では、美辞麗句集の中でも類語集を多く刊行していた出版社である大阪心齋橋筋の矢島誠進堂と、編纂者である中村巷について考察を行った。大阪の出版界が実用書の刊行によって栄えた中、矢島誠進堂も数多くの類語集を刊行し、短期間に相次いで増版されるほどの売れ行きを見せていたが、大正期以降その出版物は確認できていなかった。今回の調査によって、美文の流行が落ち着きを見せた大正期に心齋橋筋から店を移転していたことが明らかとなった。出版界における書肆の動向と美辞麗句集の消長とが直接的に緊密に関わり合っていた事例として指摘している。

第四章「学校教育における美辞麗句集——漢文教育と作文教育」では、とりわけ漢文教

育に焦点化し、漢学塾における学習や学校教育について確認し、作文書という学校教育の周辺での初学者向けとされる受容層について検討した。明治五年に学制が発布したのち、学校教育の中に見られた階層のずれの緩衝材として漢学塾や作文書が位置づけられる。さらに、こうした漢文の学習のひとつの資料として美辞麗句集があったことに言及した。

第二部「美辞麗句表現と美文」では、明治期の作文流行の中でも大きな役割を担っていた美文という文章表現と美辞麗句の関係について検証した。

第五章「大町桂月を軸とした美辞麗句共有のネットワーク——美文とはなにか」では、美文流行の先駆けとされる『美文辞書 花紅葉』（博文館、明治二十九年）の中で最も多く美文を著わした大町桂月の美文観を整理し、大町桂月がどのように美文を捉えていたのかについて考察を行った。これまでの文学史では和文脈に基盤があると捉えられてきた美文の表現について、大町桂月をはじめ同時代の美文の書き手たちは文体そのものを定義し限定していたわけではなかったことを明らかにした。加えて田山花袋『美文作法』（博文館、明治三十九年）をはじめ多くの作法書において美辞麗句の使用が促されていることに言及した。これらは類句という形態の表現の選択が意識されていたことの表れといえ、これにより青年層にとって模倣しやすい、作文における自己実現の枠組みが用意されることとなった。

第六章「小島烏水の叙景——雑誌『文庫』の美文をめぐって」では、明治二十九年に創刊された雑誌『文庫』の読者投稿欄である「山紫水明」欄における叙景の表現と、『文庫』の中で投稿者から評者となった小島烏水（久太）の紀行文の変遷について検討した。明治四十五年『日本アルプス』の著者として、これまでの紀行文学史では近代的、科学的な紀行文を記したと位置づけられていた小島烏水が、美辞麗句を用いた風景描写をごく自然なものとして受容していただけだけでなく、自身も執筆していたことを確認した。さらに烏水が明治三十五年頃から美辞麗句を批判する記述を繰り返した過程には、教養として学ばれてきた漢詩文等に基づいた美辞麗句ではなく、誇張に失する形骸化された美辞麗句に対する疑問が生じていたことが挙げられる。このことから美辞麗句表現そのものが克服された表現として見られていたわけではなかったことを指摘した。

第七章「『花紅葉』の構成と受容——美文教科書としての軌範性」では、『美文辞書 花紅葉』の構成と受容について考察した。これまで文体という視点から検討されてきた『美文辞書 花紅葉』を美辞麗句という視座から見ることで、作家特有の表現というものを超えた表現の軌範性が見出せる。風景描写に際し、漢文脈の表現が前景化していくという軌範性は、『美文辞書 花紅葉』の中で幾度となく見られ、この『美文辞書 花紅葉』が作品集でありながらも実践的な美文の教科書たり得た理由を実証的に考察した。

第三部「美辞麗句による風景描写」では、美辞麗句という表現そのものが有する歴史と使用の実態について検証した。

第八章「月ヶ瀬観梅紀行文における美辞麗句——トレース表現と美辞麗句集」では、幕

末から明治期にかけて一大勝景地としてにぎわいを見せていた奈良県の月ヶ瀬梅林を題材とした紀行文から、同一の風景を描いている風景描写について比較検討を行った。この中で梅に関する美辞麗句表現は林逋の漢詩に基づいた表現が繰り返し踏襲されていき、ながらく月ヶ瀬の梅を表現する美辞麗句となっていた。さらにこの調査により、美辞麗句集に掲載されていた美辞麗句と、実際の作品が直接的につながっていることを明らかにした。

第九章「杉田観梅紀行文における美辞麗句——同質化される風景」では、第八章の調査に接続し、同時期に月ヶ瀬に比肩する梅林として扱われていた神奈川県杉田梅林の美辞麗句表現を検証し、月ヶ瀬梅林とは地勢が異なるにもかかわらず風景描写が酷似しているという結果を得られた。漢詩文に基づいた表現の衰退に呼応するように、紀行文によってにぎわいを見せた勝景地が縮小されていたという事実は、紀行文の中で美辞麗句表現を踏襲し再構築していくというシステムが機能しなくなっていくことを示しているだろう。

第十章「美辞麗句によって「幻出」される風景——明治三十年代の『文芸倶楽部』を視座として」では、雑誌における美辞麗句表現について、明治二十八年に博文館より創刊された『文芸倶楽部』を検証した。明治三十年前後に各雑誌上において「紀行」欄などが相次いで創設されていることを指摘し、叙景にまつわる文章と美辞麗句表現が深く連関していることを述べた。その中で『文芸倶楽部』の叙景欄では美辞麗句表現が用いられ続けていた。そしてこうした美辞麗句表現が繰り返される一方、風景を数値化して表現することが試みられたものの、数値の大小により風景に優劣がつくことに対する批難がおこっており、写實的に風景を描くこととは異なり、ことばの上でのいわば美辞的風景を生成することに美辞麗句の効力が見出されていたことについて述べている。風景描写に対し新たな視点から検討することの必要性を示した。

以上、明治期における美辞麗句集および美辞麗句表現について、さまざまなジャンルや形態の文章ならびに出版状況、投書雑誌の投稿者たちの文章活動に至るまでを精察し、前時代からの表現の受容と再構築の過程を追究し、近代の文章表現史における美辞麗句について考察を行ってきた。美辞麗句という文章表現は美文の流行を背景にしながらも、必ずしもそれに依存しないかたちで、明治期を通して用いられ続けていた。従来見なされてきた近代文章表現によって上書きされた定型表現とは異なり、時代の中で周知されている表現を自身の状況の中で当意即妙に用いることが巧みな自己表現の一種として評価されるという近代以降の文章表現の楽しみ方のひとつの源流に美辞麗句があったといえるのではないだろうか。本論文は読者層が作文者となっていった明治期において、いわゆる文壇の動向のみとは異なる、それを支えていた裾野に位置する大衆をも巻き込んだ文章表現であった美辞麗句表現の実体と、それを取り巻くあらゆる層の人びとの文章活動の実態を広い視野から捉え、美辞麗句がこれまで文壇と読者とといったように位相が異なっていた諸問題を貫いて考察することができる指標のひとつであると示すことができたと考える。